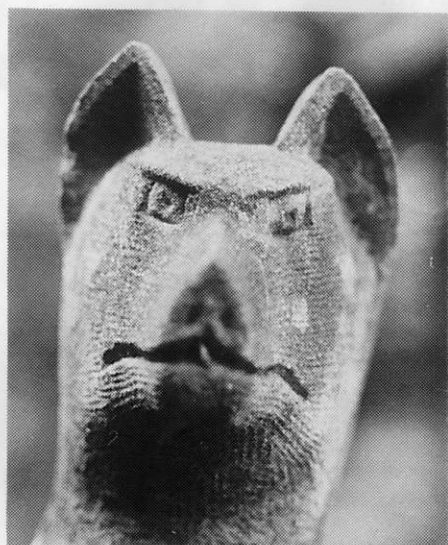
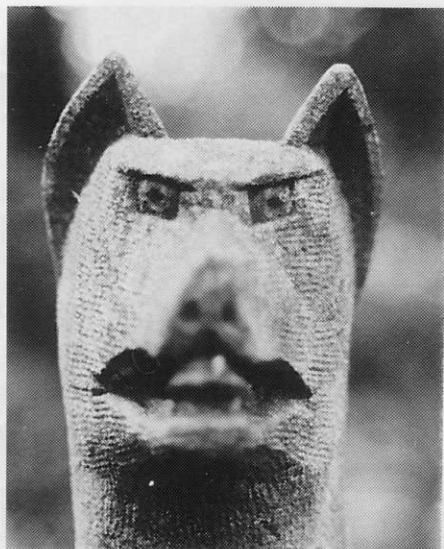


資料館だより

第 23 号

平成 7 年 11 月 12 日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館 〒208 武蔵村山市本町5-21-1 TEL 0425(60)6620



狛犬と狐

特別展「村の信仰—いま問われる心の視点—」

期 間 平成7年11月12日(日)～12月24日(日)

—— 特別展「村の信仰－いま問われる心の視点－」 ——

かつて、私たちの暮らしの中には様々な年中行事がありました。それらの行事には日々のなりわい（生業）と結びついた願いの気持ちが込められていました。また、人々の地域的なつながりのよりどころとして寺院や神社が機能していました。道端の石仏や供養塔には感謝や供養の気持ちが込められ、永く大切にされてき

ました。

市内には、先人が日常的な信仰心から造り、残したものが数多くあります。もう一度それらを見つめ、時間に追われ、日常に埋もれながら、非日常的な事件に振り回されがちな「いま」を考えてみようではありませんか。



1 細田山の庚申塔



2 真福寺山門



3 須賀神社拝殿



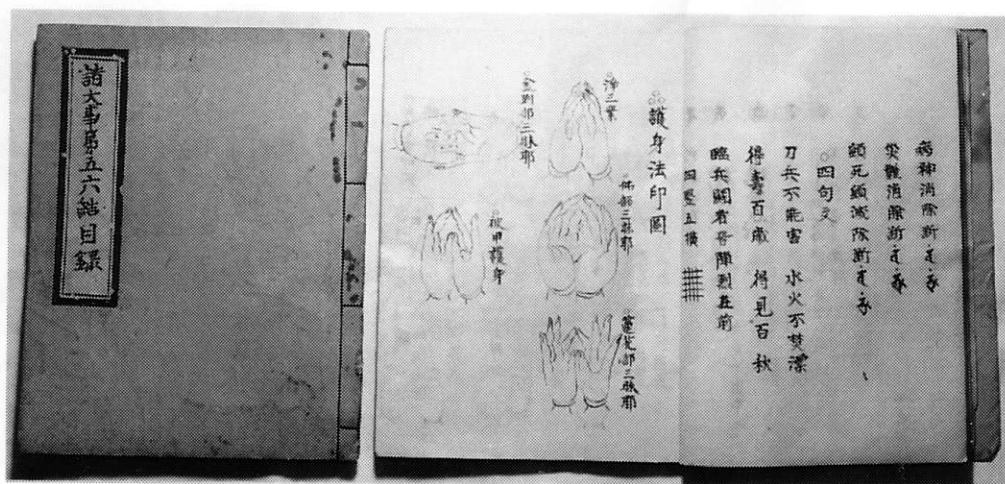
4 双盤鉦（萩ノ尾薬師堂）
—寛政四年（1792）
西村和泉守作—



5 百万遍の数珠（萩ノ尾薬師堂）



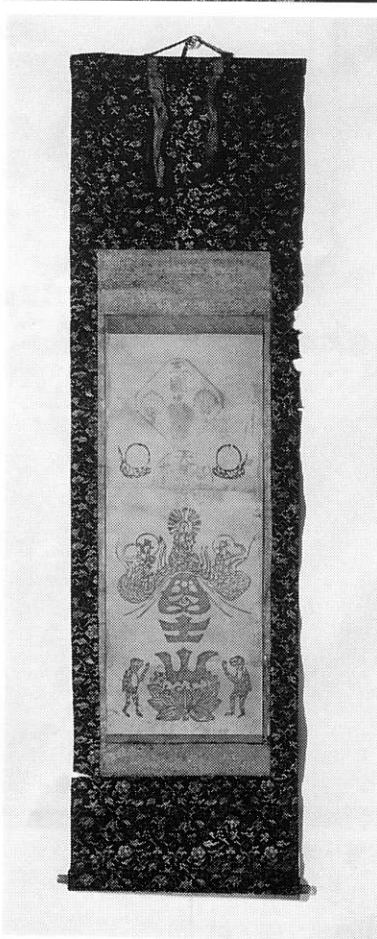
6 木像不動明王立像（旧鍛冶ヶ谷戸大行院・小林茂氏蔵）
—浄誉作—



7 諸大事目録（旧萩ノ尾常宝院・清水元治氏蔵）



8 谷ツ仙元神社
富士講



9 谷ツ富士講掛軸
(高橋正男氏蔵)



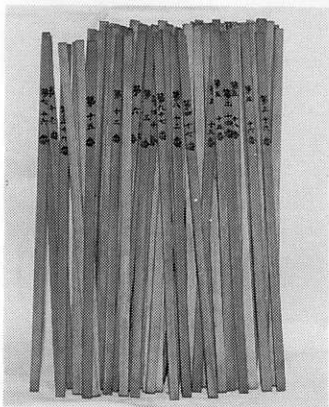
10 榛名神社御礼
(野島弘久氏寄贈)



11 新開社「不動尊」の扁額（旧殿ヶ谷新開社・福井清人氏蔵）



12 御籤箱^{くじ}
（旧殿ヶ谷新開社・福井清人氏蔵）



13 御籤^{くじ}
（旧殿ヶ谷新開社・福井清人氏蔵）



14 御札（旧殿ヶ谷新開社・福井清人氏蔵）

村山美春（市文化財保護審議会委員）

山田義高（ 当 館 ）

1 はじめに

武蔵村山市内出土の著名な考古遺物といえば、まず間違いなくこの人面把手をその一つとして挙げることができる。珍しい隻眼の人面把手であるため、何度か写真によって紹介されており、以前より当館へも度々「第三小学校出土の人面把手」の写真撮影依頼や借用依頼の問い合わせがあった。その都度、所蔵者の村山美春氏を紹介し、氏も快くそれらの依頼に応じられていた。たまたま一昨年、東京都埋蔵文化財センター主

催の多摩の遺跡展にこの人面把手が出展され、展示終了後、しばらく当館で預らせていただいた。その折、村山美春氏に「地元の武蔵村山で、ぜひこの人面把手について報告しましょう。」と申し上げたところ、御賛同をいただいた。従来、著名な資料でありながら出土遺跡の所在する市町村名、遺跡名が錯綜しており、市内でもあまり知られていなかったこともあり、改めてここに紹介するものである。（山田）

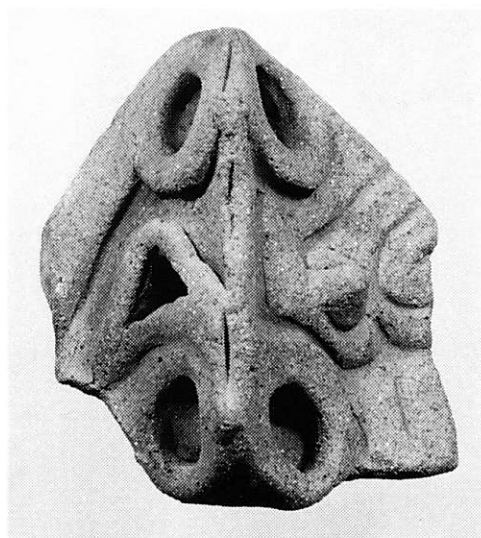
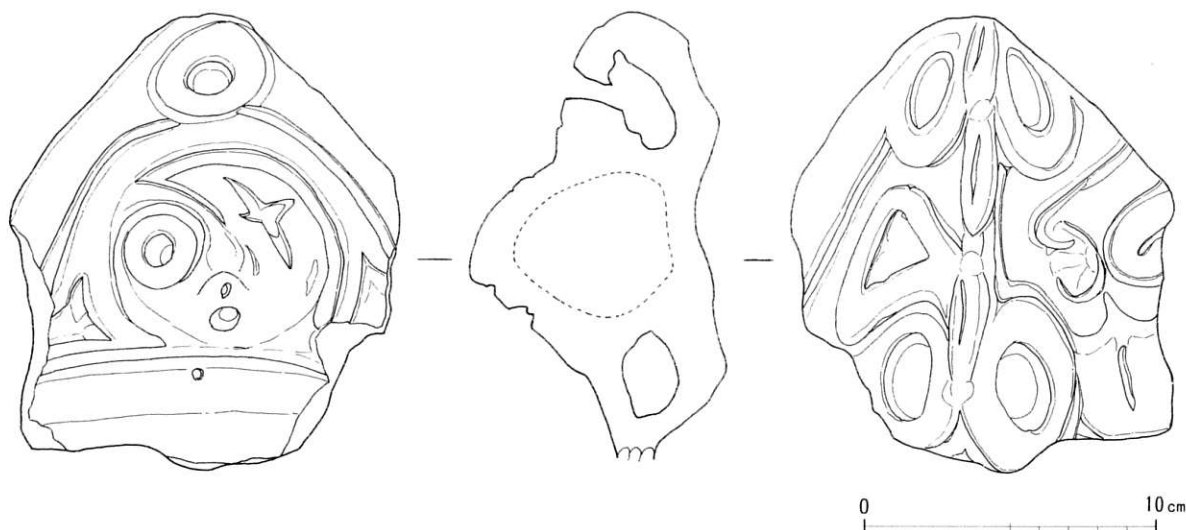


写真 屋敷山遺跡出土の人面把手（縮尺約1／3）



第1図 屋敷山遺跡出土の人面把手

2 人面把手採集の経過

人面把手の出土状況といっても、今から思えば何一つ調査したり記録を取ったりしたわけではないので詳細に記すことはできないのが実情である。たしか昭和39年頃から開始された「村山町立第三小学校の校舎改築工事」による旧木造校舎の取壊しと鉄筋3階建て新築校舎の第1次工事によって、多くの縄文期遺物の出土を見た。工事開始とともに行なわれた旧校舎の取壊しではほとんど遺跡には当たらず、鉄筋基礎のための表土除去により土器が出土したのである。

人面把手は、最初、土とともに掘り出され、人面部分がすぐにそれとわかる状態ではなく、やや大型の土器片が拾えたというぐらいの感じであった。土を除いて破片を裏返してみると、くっきりと人面が確認でき、驚いたことを鮮明に覚えている。

多くの土器片は後日水洗いをしたが、この人面把手の破片だけは特別早めに洗ったものであった。当然、両眼、口、鼻の孔部より土は流れ落ちたが、特に土の中に変わった様子は見られなかった。左眼の「×」印

部分は、特別注意して観察した。なぜ左眼のみ、それも「×」印でつぶしてあるのか、それらのことについて調べたい意欲に駆られたことが強く頭に残っている。

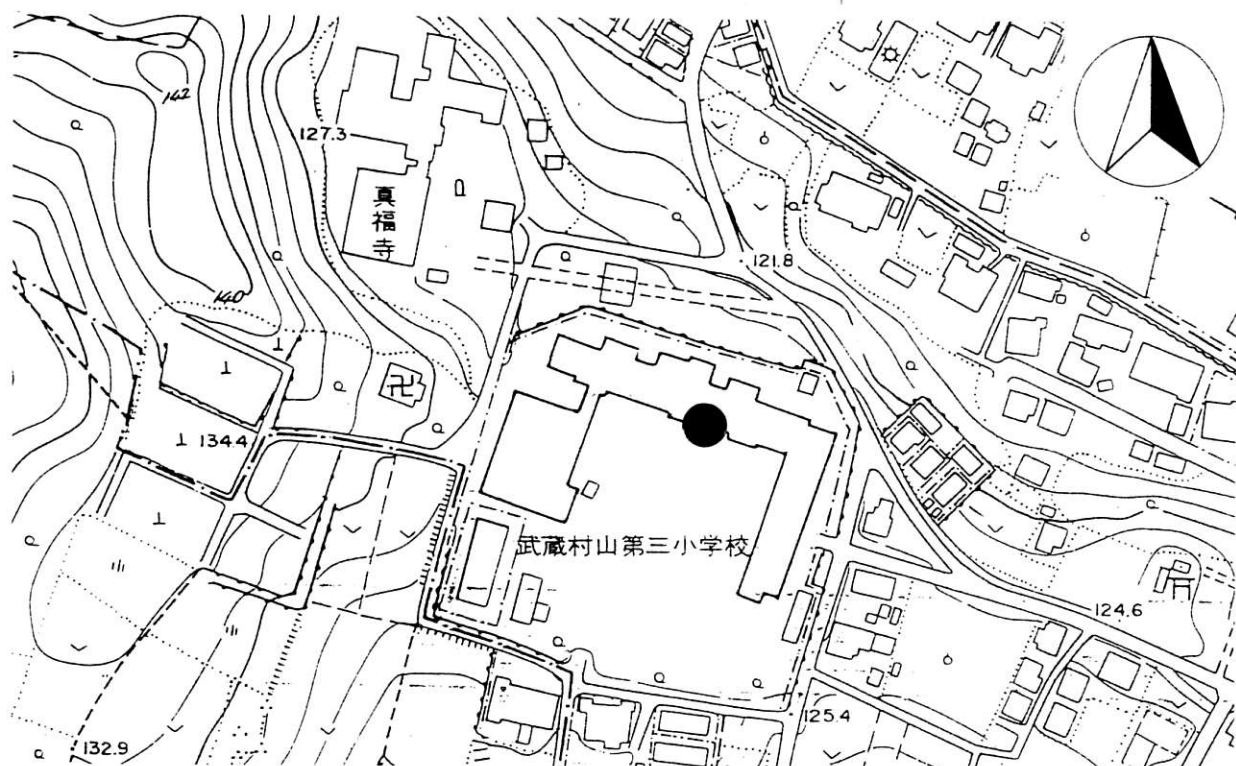
出土状況が不明ということは、発掘調査によらないことが第一の原因であるが、すでに出土した時点で工事施工者の手によって土塊が動かされた後であり、その状況を確認できなかったことにもよる。強いて記すならば、場所は現在の校舎の中央昇降口付近（第2図参照）、地表から80～100センチメートルの深さの所で、他の多くの土器片に混じって出土した。後日、その多くの土器片を並べて、この人面把手と同一個体となる土器があるか、また同種の把手があるかを楽しみに調べたが、それは徒労に終わった。

この種の人面把手は完形に復元可能なものもあるが、多くは単独、単片で出土すると聞いたことがある。もし、この人面把手が完全な形に復元されるとしたら、かなり大型の土器になるであろう。（村山）

3 人面把手について

この資料は中空の大型の把手部分である、内側に人面を配し、外側は盛り上がった立体的な装飾となって

いる。内側は低く平らな隆帯と沈線（りゅうたい ちんせん）で外周を描き、頭頂部に円形の文様（もんよう）をつけ、その中央に穴を開けている。



● 人面把手出土位置

第2図 人面把手出土位置（縮尺1/2,500）

人面部分を丸く盛り上げており、その中に眼、鼻、口を配している。左眼は「×」印に描き、^{せきがん}隻眼を表現している。耳に相当する部分には大きくえぐった三叉文が見られる。外側の装飾は、上下に円形の眼鏡状の枠をつくり、中段左側に三角形の枠、右側に突起と曲線の文様を描く。盛り上がった中央頂部には縦に連鎖状の文様を配している。全体に平らな隆帯を用い、ていねいにつくられている印象を受ける。残存高15.5センチメートル、人面部高さ11.8センチメートル、最大幅13.1センチメートルで、明るい赤褐色を呈している。胎土に金雲母と長石の粒子が目立つ。

出土状況、伴出資料が不明であり、土器全体の文様構成もわからないので明確な時期比定は難しいが、他

の完形品と比較すると、^{かつざかしき}勝坂式中葉から後葉にかかる時期と考えられる。

近年、こうした人面把手の類例は増え、吉本・渡辺両氏により東日本を対象に集成・分析作業が行なわれている。最後に、屋敷山遺跡出土の当該人面把手を取り上げた既出文献を列挙しておく。（山田）

- 1 江坂輝弥 1970
「口絵解説 顔面把手新例紹介」「考古学ジャーナル」No.44
- 2 塩野半十郎 1970
「多摩を掘る」
- 3 河野重義 1991
「片目の顔面把手について」「多摩のあゆみ」第62号
- 4 東京都埋蔵文化財センター 1993
「多摩の遺跡展発掘物語」
- 5 吉本洋子・渡辺誠 1994
「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」「日本考古学」第1号

——— 清水元治氏より風景画52点が寄贈される ———

去る6月8日に市内中央三丁目にお住まいの清水元治氏より風景画52点の寄贈をいただきました。

清水氏はかつて絵馬を描いたり、レース編みの図案を手掛け、現在は肖像画を職業とする画家であり、教育委員会でも「武蔵村山の昔がたり（口頭伝承編）」や「武蔵村山の昔語り（生活誌編）」などの刊行物でさし絵を描いていただきました。

この度、寄贈いただいた52点の風景画は、ここ数年で各地を回り、印象に残った風景を描いたものだそうです。「自分の作品には愛着があるが、今後、散逸してしまうことを思えば、歴史民俗資料館で一括収蔵してもらいたい。」と寄贈を申し出られました。

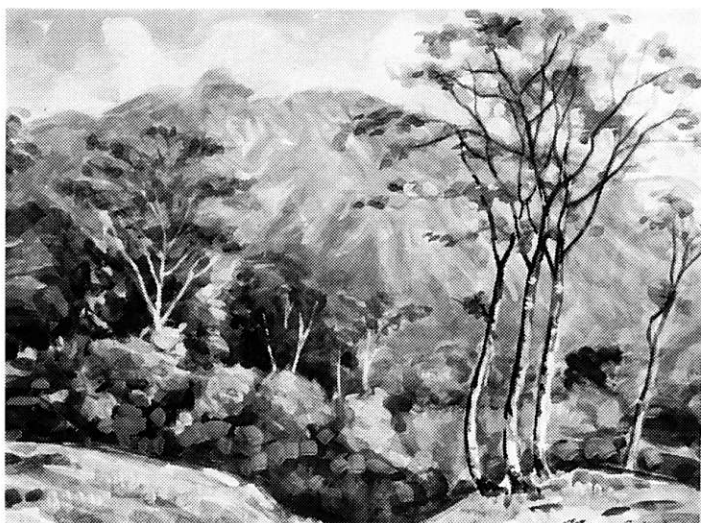
地域あるいは郷土の画家の描いた絵画の一括資料として貴重なものであるため、当館では永く保存し、今後の活用を図りたいと思っています。

右の写真はその一部ですが、主なタイトルを紹介すると次のとおりです。

忍野の富士	群馬水上
聖高原	埼玉川島村の荒川土手
赤城山	長野安雲野
日光杉並木	青梅の公園
野尻湖	石和の桃
五日市の春	奥入瀬
上高地	



群馬谷川岳の風景



相馬の風景